

# 琉球大学学術リポジトリ

## 中学生の「学び方」に対する意識に関する一考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2024-04-16 キーワード (Ja): 学び方, 選択, 個別最適な学び, 協働的な学び キーワード (En): 作成者: 神里, 美智子, 岸本, 恵一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002020268">https://doi.org/10.24564/0002020268</a>

## 中学生の「学び方」に対する意識に関する一考察

神里 美智子<sup>1</sup>・岸本 恵一<sup>2</sup>

### A Consideration on Junior high school student's consciousness for "How to learn"

Michiko KAMIZATO<sup>1</sup>・Keiichi KISHIMOTO<sup>2</sup>

#### 要約

本研究は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実へ向けてより効果的な指導に寄与するため、多様な学び方を体験し自分に必要な学び方を選択する学習に取り組んだ85名の生徒を対象に、学習への興味等と、学び方に関する質問紙調査を実施した。その結果、①友達と一緒に考えながら取り組む楽しさについて9割を超える生徒が肯定的に捉えていること、また、答えは自分で考えて探していくものだと思うことについて8割以上の生徒が肯定的に捉えていることが示唆された。多様な学び方を体験し自分に必要な学び方を選択する学習の中に、他者と協働しながら学びを進めることの楽しさやよさを実感する要素や、学びを自分自身の力で獲得するといった学習観をもつことができる要素が含まれていることが示唆された。②学び方について、9割以上の生徒が友だちと勉強を教えあうことを、また、7割以上の生徒が自分に合った勉強のやり方を工夫したり、考えても分からないことは先生に聞いたりすることを選択しながら学習を進めていることが示唆された。③授業の内容が理解できていると感じている生徒は、考えても分からないことは先生に聞いたり、問題を解いた後ほかの解き方がないかを考えたり、授業で習ったことを自分でもっと詳しく調べたりしながら学習を進めている可能性が示唆された。

キーワード：学び方、選択、個別最適な学び、協働的な学び、

#### 1 はじめに

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)(中央教育審議会 2021)(以下「令和3年答申」という。)において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的に充実していくことの重要性が示されている。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について、自らの学びを調整して主体的に学習を進め、多様な他者と学び合いながら、よりよい学びにつなげていくことが大切である。そのために自分にふさわしい学習方法を模索するような態度を育成することが求められている。

一方、「子どもの生活と学びに関する親子調査 2022 ダイジェスト版」(ベネッセ教育総合研究所 2023)(以下「学び調査ベネッセ」という。)では、学習方法に悩む子供が増えていることが報告されており、学校で学習方法を指導することの必要性を指摘している。

これらのことから、自分にふさわしい学習方法を模索することができるよう学習方法の指導を工夫していくことが大切となる。すなわち、主体的に学習を進めることができるよう、多様な子

<sup>1)</sup> 琉球大学教職センター

<sup>2)</sup> 浦添市立浦添中学校

供一人一人が個々の状況に応じて自分に必要な学び方を見いだすことができるよう促すことが重要であり、学び方を学ぶ機会を設定することが必要だと考える。学び方を学ぶ機会について、佐々木（2022）は多様な学び方を経験することの大切さを、星（2022）は学び方を選択することの重要性を指摘している。

以上のことを踏まえると、中学校の授業における「学び方」に着目し、子供がどのように学びを進めているかについて「学び方」に対する意識を調査することは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けて、より効果的な支援策を検討する上で重要な視点であり、意義がある。

そこで、本研究では、多様な学び方を経験し自分に必要な学び方を選択する学習に取り組んだ中学生の「学び方」に対する意識を質問紙調査により明らかにすることを目的とした。なお、本研究における「学び方」とは、質問紙調査「学び方に関する意識」に関する質問項目でたずねたものとする。そこには、「友達と教えあう」などの学習形態（個別、ペア、グループ）を含んでいる。

## 2 研究の目的

多様な学び方を経験し自分に必要な学び方を選択する学習に取り組んだ中学生の「学び方」に対する意識を質問紙調査により明らかにすることを目的とする。そして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けて、より効果的な支援に寄与したい。

## 3 研究の方法

- (1) 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実と、学び方に関する内容について整理する。
- (2) 学習に対する興味等と、学び方について質問紙調査を実施し、結果を考察する。

### ①対象と期間

公立中学校の1年生85名を対象にした。調査実施の時期は、2023年11月中旬であった。

### ②調査方法

以下に関し、質問紙調査を実施した。

#### ○「学習への興味等に関する調査」

多様な学び方を経験し自分に必要な学び方を選択する学習に対する評価を調査することを目的に、学習への興味・理解度等に関する質問項目を設定した。回答は「そう思う」～「そう思わない」までの4件法を用いて求めた。

#### ○「学び方に関する調査」

学び方を調査することを目的に、「学び調査ベネッセ」の「勉強方法」に関わる質問項目を参考に作成した。回答は「よくする」～「まったくしない」までの4件法を用いて求めた。

また、授業の内容が理解できていると感じている生徒と感じていない生徒を比較するために、学習への興味等に関する調査の質問項目「授業の内容が理解できている」での「そう思う・少しそう思う」と回答した群を内容を理解できていると感じている群、「あまりそう思わない・そう思わない」と回答した群を内容の理解ができていないと感じている群として、参加者間でt検定を行った。

## 4 研究の内容

### (1) 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実へ向けて

「教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）」（以下、「第4期基本計画」という。）に、「目標1 確かな学力の育成，幅広い知識と教養・専門的能力・職業実践力の育成」が掲げられており、基本施策の1つとして、「令和3年答申」で示された「個別最適な学びと協働的な学

びの一体的充実」が明記されている。確かな学力等の育成を図る上で、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が重要とされる。

令和3年答申において、目指すべき新しい時代の学校教育の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言された。資質・能力を育成するに当たっては、個別最適な学びと協働的な学びという観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが示されている。個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実することは、学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進める上で重要となる。

### ① 個別最適な学び

令和3年答申では、「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、子供が自ら調整しながら学びを進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。

「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料(令和3年3月版)」(文部科学省2021)(以下、「令和3年参考資料」という。)に次のように明記されている。

- 「指導の個別化」は一定の目標を全ての児童生徒が達成することを目指し、個々の児童生徒に応じて異なる方法等で学習を進めることであり、その中で児童生徒自身が自らの特徴やどのように学習を進めることが効果的であるかを学んでいくことなども含みます。
- 「学習の個性化」は個々の児童生徒の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げることを意味し、その中で児童生徒自身が自らどのような方向性で学習を進めていったら良いかを考えていくことなども含みます。

そして、これらの点に関連し、個々の児童生徒に合った多様な方法で学んでいくことで、確実な資質・能力の育成につながっていくことが期待されており、自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなど児童生徒の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習が促されるよう工夫することが求められている。

さらに、令和3年答申には、「指導の個別化」と「学習の個性化」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」であり、これを教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であることが示されている。「個に応じた指導」に当たっては、令和3年参考資料において、「指導の個別化」と「学習の個性化」という二つの側面を踏まえるとともに、ICTの効果的な活用も含め、児童生徒が主体的に学習を進められるよう、それぞれの児童生徒が自分にふさわしい学習方法を模索するような態度を育てることが大切であることが強調されている。

これらのことから、「個別最適な学び」について、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが大切であり、学習活動を選択する機会を設けるなど、それぞれが自分にふさわしい学習方法を模索することができるような指導を工夫していくことが重要だと考える。

### ② 協働的な学び

令和3年答申では、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、「協働的な学び」を充実することの重要性が示されている。また、集団の中で個が埋没してしまうことがないよう、子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出していくようにすることが求められている。

令和3年参考資料には、「知・徳・体を一体的に育むためには、教師と児童生徒の関わり合

いや児童生徒同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動、専門家との交流など、様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことが重要で  
す。」とある。ICTを利用して空間的・時間的制約を緩和することによって、今までできなかった学習活動も可能となることが期待される一方、同じ空間で時間を共にすることでお互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識する必要性が示されている。リアルな体験を通じて学ぶ機会を設けることも「協働的な学び」を充実する上で重要だと考える。

これらのことから、協働的な学びについて、多様な他者と学び合いながら、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、よりよい学びを生み出していくことができるようにしていくことが大切だと考える。

### ③ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

令和3年答申では、「各学校においては、教科等の特質に応じ、地域・学校や子供の実情を踏まえながら、授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実」することの重要性が示されている。また、生徒自身がICTを「文房具」として自由な発想で活用できるよう環境を整え、授業をデザインすることも求められている。

学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進めるために、新たに学校教育における基盤的なツールとなるICTを活用しながら、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性を生かす「協働的な学び」の一体的な充実を図っていくことが大切となる。

以上を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について、自らの学びを調整して主体的に学習を進め、多様な他者と学び合いながら、よりよい学びにつなげていくことだと考える。そのために「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実が図られることが大切であり、主体的に学習を進めていくことができるよう、多様な方法で学んだり学習活動を選択したりする機会を設定するなどして、自分にふさわしい学習方法を模索することができるよう指導を工夫していくことが重要だと考える。

### ④ 学び方を学ぶ必要性

「親子調査ベネッセ」によれば、「上手な勉強のしかたがわからない」と回答した中学生は、約68%となっており、2019年から22年にかけて4年間で8.1ポイント増加し、学習方法に悩む子どもが増えていると報告している。「学校や家庭で学習方法を指導することは、子どもの学習意欲や成績、そのほかの資質・能力の向上に効果がある。」と述べ、学校で学習方法を指導することの必要性を指摘している。

このことから、自分にふさわしい学習方法を模索できるよう、学習方法を指導することが大切となる。すなわち、子供一人一人が個々の状況に応じて自分に必要な学び方を見いだすことができるよう促すために、多様な方法で学んだり学習活動を選択したりする機会を設定するなど、学び方を学ぶ機会を設定することが必要だと考える。

## (2) 学び方を学ぶ機会

### ① 多様な学び方の経験と選択の機会の提供

令和3年答申では、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、資質・能力の三つの柱の一つである「学びに向かう力、人間性等」と関連性が強いことが示されている。そして

「学びに向かう力の育成は幼児期から成人までかけて徐々に進んでいくものであるが、初期の試行錯誤段階を経て、様々な学びの進め方や思考ツールなどを知り、経験していくことが重要である」とされる。さらに、中学校以降において、多様な学習の進め方を実践できる環境を整えることの重要性が示されている。

佐々木(2022)は、子供が最適な学びを進めるに当たって、子供は経験が少なく、どのようにしていったら良いのかがわからないことが多いとして、「教師が教えなければ思いつかないでしょう。それを何回か経験していくうちに、自分に合ったやり方を見つけられます。やってみないと良さがわからないこともありますから、いろいろなやり方を一度は経験させることも大事です。」と述べている。多様な学び方を知るために、いろいろなやり方を実際に使ってみる経験を積み重ねていくことが必要だといえる。

さらに、星(2022)は、「さまざまな学び方を身につけておき、状況に合わせて学び方を選べれば、目の前に与えられた課題に自分の才能を最大限に引き出すことができます。」「困難に行き詰まってしまった場合でも、やり方を変えてみたりして試行錯誤することで、柔軟な解決法にもつながるでしょう。」と述べ、学び方を選択することの必要性を指摘している。ここで、選択肢は教師が用意するのではなく、これまでの経験を生かしながらどのように学ぶかについて子供自ら見いだしていくことが重要となる。

これらのことから、個々の状況に応じた自分に必要な学び方を見いだすために、授業において、多様な学び方を実際に使い、そのよさを実感するといった学び方を経験する機会を設け選択肢を広げながら、学び方を選択することができるような授業をデザインしていくことが大切だと考える。

## ②学び方と「見方・考え方」

『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』(平成29年7月文部科学省)には、各教科等の「見方・考え方」を働かせ、各教科等の学習の過程を重視して充実を図ることが示されている。各教科等の「見方・考え方」については、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という物事の特徴や本質を捉える視点や、思考の進め方や方向性であることが説明されている。

「何に着目し、どのように考えるのか」といった学習の視点をもつことは、自ら調整し主体的に学習を進める上で重要だと考える。意図的・計画的に「見方・考え方」を働かせて学習対象と関わり、関連付けていく経験を積み重ねていくことにより、困難に行き詰まってしまった場合でも試行錯誤しながら納得解を生み出すことにもつながると考える。主体的に学習を進める上で、子供が「見方・考え方」を意識的に働かせることができるよう促す工夫がより一層重要だと考える。

## (3) 子供の学びを支える教師の役割

令和3年答申には、教職員の姿として、「子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。その際、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。」と示されている。子供一人一人に寄り添いサポートする役割が求められている。

佐藤(2018)は、教育者には「ティーチャー (teacher, 教師)」「チューター (tutor, 家庭教師)」「コーチ (coach, 指導者)」「ファシリテーター (facilitator, 促進者)」の4種類があり、テクノロジーを活用した教育において、学習者が多人数の場合は「ファシリテーター」として、個別に対応するときは「コーチ」の役割が重要になると述べている。

山本(2019)は、「生徒が学び方のプロセスや答えを自ら発見できるように導いていく際に

は、教師は主に Facilitator や Coach に役割の主軸を置くことが必要になってくる」として、子供の実態に合わせ自分の立ち位置をしっかりと定めながらも、それぞれの機能を適宜使い分けることが、これからの教師には求められると指摘している。

永田(2022)は、「ICTを活用することは方法であり、目的ではありません。目的は、その授業の目標の実現です。」と述べ、教師の役割として、目標に迫れる場面を見極めて活用の仕方を決めることの重要性を指摘している。

また、令和3年答申において「一人一人の子供を主語にする」として指導観と学習観の転換が求められている。「R4 沖縄県版 魅力ある学校づくりパンフレット」(沖縄県教育委員会2022)では、子供が自分自身の力で学びを獲得するといった学習観の転換と、そのための指導観の転換の必要性が記されている。

子供の学びを支える教師の役割を考える際に、目標とする資質・能力を明確にするとともに、多様な個々の状況に応じた適切な支援を行うことが重要であり、子供の学びの状況を丁寧に見取ることが一層大切になると考える。そしてこれからの教師には、教えるべきことは「ティーチャー」としてしっかりと教えるとともに、「ファシリテーター」や「コーチ」として個々の可能性を引き出し、よりよい学びへと促す役割が大切だと考える。

## 5 実践

多様な学び方を経験し自分に必要な学び方を選択する学習を取り入れた授業を、中学校1年生85名を対象に、2023年9月上旬から11月中旬の期間で実施した。第二筆者が、数学の授業において行い、第一筆者が観察者として授業の観察・記録を行った。主な実践例を、以下に示す。

なお、生徒はこれまでの授業において1人1台端末を日常的に活用してきている。クラウドを介して、教師と生徒、生徒同士が情報を共有し、学習を進める環境にある。

授業者は「学びを掴みとる」ことの重要性を日常的に生徒と共有している。また、生徒の声を聞き取りながら、授業を展開している。毎回の授業では、確認問題と振り返りを行っている。生徒は本時のノートをICT端末で撮影し、クラウドを介して教師に提出している。教師はそれを形成的評価に生かしている。

### 【実践例1】

①単元名 文字と式「2文字式の計算 ①1次式の計算」

②本時の目標 項と係数の意味を理解し、文字の部分が同じ項を1つの項にまとめることができる。(知識・技能)

③授業のポイント

- ・教科書(学習者用デジタル教科書)を活用して試行錯誤しながら自ら答えを獲得していくことができるようにする。
- ・学習形態(個別、ペア、グループ)を自ら選択し、学習を進めていく。
- ・理解を促すために、教師は自作した説明動画を配信し、生徒は必要に応じて活用する。

④授業の様子

- ・生徒は配布された課題の解決に向けて、教科書または学習者用デジタル教科書を選択して読み進め取り組んだ。一人一人が必要に応じて学習形態を変えながら進めていき、選択する学習形態を選択するタイミングは、生徒各自で決めていった。一人で課題に向かう生徒や、離席しペアやグループといった複数で進める生徒、複数で考えた後再び一人

で考える生徒，教師に質問する生徒の姿が見られた。

- ・教師は，個々の状況を観察し丁寧に見取り，質問に答えるなど個別指導を行った。

### 【実践例2】

①単元名 方程式「1方程式とその解き方 ③いろいろな方程式」

②本時の目標 係数に分数をふくむ方程式を解くことができる。(知識・技能)

③授業のポイント

- ・数学を得意とする2名の生徒が進行役となり授業を進める。
- ・進行役の生徒らは，事前に，教師と学習の進め方について打ち合わせを行ったり，学習課題の解決に取り組んで解決過程などを考えたりしながら授業の準備をする。
- ・既習の内容を生かして生徒同士が教えあいながら協働することのよさを体験する。
- ・学級の生徒たちは教師に頼らず自分たちの力だけで課題解決に向かう。

④授業の様子

- ・進行役の生徒が，導入時に，学習目標や本時の流れを確認した。
- ・展開では，まず個別に学習課題に取り組んでいった。進行役の生徒らは，机間を歩きながら，学習課題の解決に向かって取り組んでいる生徒に声をかけたりアドバイスをしたりしている様子が見られた。
- ・次第に，学級の生徒らは離席しながらペアやグループとなって，学び合う姿が見られた。黒板を使って教えあう生徒や，既に解決できた生徒が別の生徒に教える場面も見られた。
- ・進行役の生徒らへインタビューをしたところ，進行については日常の教師をロールモデルとして，その言動を参考にしていたことが分かった。
- ・教師は，全体の状況を見取りながら，子供一人一人の状況を把握し，ミニホワイトボードを用い，考え等を可視化して個別支援を行っていた。

### 【実践例3】

①単元名 比例と反比例 「2比例の性質と調べ方 ③比例の表，式，グラフ」

②本時の目標 比例定数が分数のグラフの特徴を捉え，説明することができる。

(思考・判断・表現)

③授業のポイント

- ・導入では，前時に学んだ内容である，表と式とグラフの関係を捉え比例定数が正の数と負の数のグラフの共通点と相違点を確認したことを想起できるよう，電子黒板に前時の板書を提示する。
- ・自分でグラフをかくためのポイントを掴みとれるよう，前時との違いを認識させ、比例定数とグラフのつながりを意識できるようにする。
- ・生徒の活動に十分な時間を設けるため，導入時には，電子黒板を活用し授業の流れ等を短い時間で確認する。
- ・展開では，生徒は自分に必要な学び方を選択し，自らのタイミングで学び方を選び直しながら学習を進める。選択肢は，教師が用意するのではなく，生徒が自分の経験を組み合わせたり，創造したりして，自ら考え，選択する。
- ・終末に，確認問題と振り返りを行い，理解できたか確認する。教師は電子黒板に複数の生徒の振り返りを紹介して，生徒が多様な考え方に触れ，自分の学びと関連付けながら学びを深めることにつなげる。



④授業の様子

- ・個別に教科書やノートを振り返って調べたり、生徒同士で質問やアドバイスをし合ったり、また他の生徒から教えてもらった後に再び自分一人で考えたりする様子が見られ、個の学びと協働的な学びを往還しながら学習を進める姿があった。
- ・教師は、ファシリテーターとしての役割として学びを促すことができるよう子供一人一人の状況を見取りながら、個に応じた支援を行っていた。「分からなかったら友達のものを見せてもらってもいいよ。きいてきていいよ。」という声をかけて生徒と生徒をつなげた。また学びの過程を認める声かけをしながら学習の視点や既習の活かし方などを助言していた。

## 6 結果と考察

### (1) 学習への興味等に関して

多様な学び方を経験し自分に必要な学び方を選択する学習への興味等に関する調査の結果を表1に示す。

表1 学習への興味等に関する調査の結果

質問項目	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1 友達と、一緒に問題を解くことは楽しい	74.1%	16.5%	9.4%	0%
2 答えは自分で考えて、探していくものだ	47.1%	37.6%	12.9%	2.4%
3 解決するために、いろいろ考えることは楽しい	34.1%	41.2%	20.0%	4.7%
4 授業の内容の理解ができている	27.1%	47.1%	23.4%	2.4%

質問項目1「友達と、一緒に問題を解くことは楽しい」に関して、「そう思う・少しそう思う」と答えた生徒は90.6%、「あまりそう思わない・そう思わない」と答えた生徒は9.4%であった。このことから、友達と一緒に考えながら取り組む楽しさの項目において9割を超える生徒が肯定的に捉えていることが示唆された。学習の中に、他者と協働しながら学びを進めることの楽しさやよさを実感することができる要素が含まれていた可能性が示唆される。

質問項目2「答えは自分で考えて、探していくものだ」に関して、「そう思う・少しそう思う」と答えた生徒は84.7%、「あまりそう思わない・そう思わない」と答えた生徒は15.3%であった。また、質問項目3「解決するために、いろいろ考えることは楽しい」に関して、「そう思う・少しそう思う」と答えた生徒は75.3%、「あまりそう思わない・そう思わない」と答えた生徒は24.7%であった。これらのことから、答えは自分で考えて探していくことに関して8割以上の生徒が、試行錯誤しながら取り組むことに関して7割以上の生徒が、肯定的に捉えていることが示唆された。学習の中に、自らの学びは自分自身の力で獲得するという学習観をもつことができる要素が含まれていた可能性が示唆される。

質問項目4「授業の内容の理解ができている」に関して、「そう思う・少しそう思う」と答えた生徒は74.2%、「あまりそう思わない・そう思わない」と答えた生徒は25.9%であった。7割以上の生徒が授業の内容を理解できていると感じていることが示唆された。学習の中に、理解を促す要素が含まれている可能性が示唆される。

## (2) 学び方に関わる質問項目に関して

### ① 学び方に関わる調査について

表2は、学び方に関わる質問項目に対する結果について示したものである。

表2 学び方に関わる調査の結果

質問項目	全体の平均 (標準偏差)	よくする	ときどきする	あまりしない	まったくしない
1 友だちと勉強を教えあう	3.52 (0.70)	62.4%	28.2%	8.2%	1.2%
2 自分に合った勉強のやり方を工夫する	2.98 (0.80)	28.2%	43.5%	25.9%	2.4%
3 考えても分からないことは、先生に聞く	2.95 (0.84)	28.2%	43.5%	23.6%	4.7%
4 何が分かっていないか確かめながら勉強する	2.87 (0.81)	22.3%	47.1%	25.9%	4.7%
5 くり返し書いて覚える	2.74 (0.96)	25.9%	32.9%	30.6%	10.6%
6 問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える	2.45 (0.89)	11.8%	36.5%	36.5%	15.2%
7 授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる	2.38 (0.85)	11.8%	27.1%	48.2%	12.9%

全体の平均が高い項目は、質問項目1「友だちと勉強を教えあう」、質問項目2「自分に合った勉強のやり方を工夫する」、質問項目3「考えても分からないことは、先生に聞く」であった。

質問項目1「友だちと勉強を教えあう」に関して、「よくする・ときどきする」と答えた生徒は90.6%、「あまりしない・まったくしない」と答えた生徒は9.4%であった。このことから、9割以上の生徒が友だちと勉強を教えあうことを選択しながら学習を進めていることが示唆される。

質問項目2「自分に合った勉強のやり方を工夫する」に関して、「よくする・ときどきする」と答えた生徒は71.7%、「あまりしない・まったくしない」と答えた生徒は28.3%であった。このことから、7割以上の生徒が自分に合った勉強のやり方を工夫することを選択しながら学習を進めていることが示唆される。

質問項目3「考えても分からないことは、先生に聞く」に関して、「よくする・ときどきする」と答えた生徒は71.7%、「あまりしない・まったくしない」と答えた生徒は28.3%であった。このことから、7割以上の生徒が考えても分からないことは、先生に聞くことを選択しながら学習を進めていることが示唆される。

一方、全体の平均が低い項目は、質問項目6「問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える」、質問項目7「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」であった。

質問項目6「問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える」に関して、「よくする・ときどきする」と答えた生徒は48.3%、「あまりしない・まったくしない」と答えた生徒は51.7%で

あった。このことから、およそ5割の生徒が問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考えることを選択しながら学習を進めていることが示唆される。

質問項目7「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」に関して、「よくする・ときどきする」と答えた生徒は38.9%、「あまりしない・まったくしない」と答えた生徒は61.1%であった。このことから、およそ4割の生徒が授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べることを選択しながら学習を進めていることが示唆される。

## ②理解度と学び方の関連について

学習への興味等に関する質問項目4「授業の内容が理解できている」に関して、「内容を理解できていると感じている群」と「内容の理解ができていないと感じている群」の2群に分けた上で比較を行った結果を表3に示す。

表3 理解度と学び方の関連についての調査の結果

質問項目	全体の平均 (標準偏差)	内容を理解が できていると 感じている群 (I)	内容の理解が できていない と感じている 群(II)	有意差 (I・II)
1 友だちと勉強を教えあう	3.52 (0.70)	3.62 (0.55)	3.23 (0.97)	+ (.05<p<.10)
2 自分に合った勉強のやり方を工夫する	2.98 (0.80)	3.05 (0.81)	2.77 (0.75)	ns (.10<p)
3 考えても分からないことは、先生に聞く	2.95 (0.84)	3.10 (0.78)	2.55 (0.91)	* (.01<p<.05)
4 くり返し書いて覚える	2.74 (0.96)	2.79 (1.03)	2.59 (0.73)	ns (.10<p)
5 何が分かっていないか確かめながら勉強する	2.87 (0.81)	2.92 (0.85)	2.73 (0.70)	ns (.10<p)
6 問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える	2.45 (0.89)	2.56 (0.91)	2.14 (0.77)	* (.01<p<.05)
7 授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる	2.38 (0.85)	2.49 (0.90)	2.05 (0.65)	* (.01<p<.05)

有意差が示された項目は、質問項目3「考えても分からないことは、先生に聞く」、質問項目6「問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える」、質問項目7「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」であった。

質問項目3「考えても分からないことは、先生に聞く」に関して、5%水準で有意差が確認された。内容を理解できていると感じている群の方が、考えても分からないことは先生に聞いていることが確認された。このことから、授業の内容を理解するに当たって、自分の考えを

もって学習を進めながら、分からないことがあれば分かるようになるまで先生に聞いている可能性が示唆される。

質問項目 6「問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える」に関して、5%水準で有意差が確認された。内容を理解できていると感じている群の方が、問題を解いた後ほかの解き方がないかを考えていることが確認された。このことから、よりよい解決法を模索しながら問題の解決にのぞんでいる可能性が示唆される。

質問項目 7「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」に関して、5%水準で有意差が確認された。内容を理解できていると感じている群の方が、授業で習ったことを自分でもっと詳しく調べていることが確認された。このことから、学んだことをもとに新たな問いをもち自ら設定した課題を追求している可能性が示唆される。

## 7 まとめ

本研究は、多様な学び方を体験し自分に必要な学び方を選択する学習に取り組んだ中学生の「学び方」に対する意識について 85 名の生徒を対象に、学習への興味等、学び方に関する質問紙調査を実施した。その結果、以下のことが考察された。

- ①友達と一緒に考えながら取り組む楽しさについて 9 割を超える生徒が肯定的に捉えていること、また、答えは自分で考えて探していくものだと思うことについて 8 割以上の生徒が肯定的に捉えていることが示唆された。多様な学び方を体験し自分に必要な学び方を選択する学習の中に、他者と協働しながら学びを進めることの楽しさやよさを実感する要素や、学びを自分自身の力で獲得するといった学習観をもつことができる要素が含まれていることが示唆された。
- ②学び方について、9 割以上の生徒が友だちと勉強を教えあうことを、また、7 割以上の生徒が自分に合った勉強のやり方を工夫したり、考えても分からないことは先生に聞いたりすることを選択しながら学習を進めていることが示唆される。
- ③授業の内容が理解できていると感じている生徒は、考えても分からないことは先生に聞いたり、問題を解いた後ほかの解き方がないかを考えたり、授業で習ったことを自分でもっと詳しく調べたりしながら学習を進めている可能性が示唆された。

学び方のよさを体験することは、学び方の選択に影響を与えていることがうかがえる。

今後は、多様な学び方を体験し自分に必要な学び方を選択する学習への興味や理解度に対して、肯定的に捉えることができている生徒を詳細に分析し、支援策を検討することが課題である。

また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けて、主体的に学習を進めることができるよう、多様な方法で学んだり学習活動を選択したりする機会とともに、自分に必要な学びについての選び方を学ぶ機会といった指導についても検討していきたい。

## <謝辞>

本研究を進めるにあたり、ご協力を賜りました、浦添市立浦添中学校の校長先生はじめ諸先生方に、心より御礼申し上げます。

### ＜引用・参考文献等＞

- ベネッセ教育総合研究所, 2023,「子どもの生活と学びに関する親子調査 2022 ダイジェスト版」
- 中央教育審議会, 2021,『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～(答申)」
- 星友啓, 2022,『スタンフォードが中高生に教えていること』p173, SBクリエイティブ株式会社
- 文部科学省, 2021,「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料(令和3年3月版)」
- 文部科学省, 2017,『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』
- 永田潤一郎, 2022,『「365日の全授業」DX 中学校数学』p.11, 明治図書出版株式会社
- 沖縄県教育委員会, 2022,『R4 沖縄県版 魅力ある学校づくりパンフレット』
- 佐々木潤, 2022,『個別最適な学び×協働的な学び×ICT入門』p.24, 明治図書出版株式会社
- 佐藤昌宏, 2018,『EdTechが変える教育の未来』p191, 株式会社インプレス
- 山本崇雄, 2019,『「教えない授業」の始め方』p.23, 株式会社アルク
- 文部科学省,「教育振興基本計画(令和5年6月16日閣議決定)」(最終アクセス日 令和5年11月24日) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/index.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/index.htm)